

小精廬日錄

一

大正八年七月下浣起筆

特別
14
1919
327





176595

小物ふり日記一



○里木の所蔵の寸法を二程人を以て購入。最
 早吉地を漁りて十年も入る難きを以て、人の不
 能を悔ふのふりし。二程のゆゑ、岸田守考の銅
 版に附して錦字箋四冊を以て珍らしきものあり。其
 こせえと未だ中にも無し。他の一、飲をの珠を
 七、一の也。汪由敷の撰、其の珠をこの珠に
 する。汪由敷、字は師名、漢書と鶴、又一
 節、其の書、心甲辰進士、其の著、詩人、徵略

有時相送也

河内

夫レ電気ノ靈妙ニ微ニ至ルニ出ス
大ニ宇宙ニ遍満シ時ニ斷テ成ルニ機ヲ

備フニ所ニ在リ感應シテ不測ニ力ヲ

現セシテ大ニ然レテ遠ニ至レテ智巧ノ解

説合ラズテハキ界域ニ属ス妙ノ皇天

化育ノ妙大ニ機ヲ贊テ無量ノ生者

ヲ存方ニ在リ玄妙ノ不可思議言信

同シク斷テ唯神トシテ讚美センノ

余ハ久シク其靈化ノ廣大ナル

慈恩ノ无边ナルヲ習讚スル

形ニ似テ其神ノ象ヲ擬シテ

相ノ時ニ在リテ其深妙ノ象

燒ルトシテ其神ノ象ヲ象

其如ク其情ヲ然者人ノ愛ス

ル慈母ノ如ク而テ其身ヲ

子ニ養ヒ其心ヲ安メテ其

現シ端在リ眉宇ノ間リ以

神ノ一語ノ言先ニ射スル

有孝天ノ子テ造化靈妙

心也



的現象ヲ寫シテ一神像

ヲ描出セシテ其體

ニケルアソビエ口由言ハルアリ凡ソ

事物トシテ其的繪畫ニ為

スハカラサレモノ無シト云ハレ

洋ノ末西古今テノ間々為トス自然

ト人事ヲニ係ラズ趣後也亦

儂大ニ即機改ハル用ニ之リ是レ其レ形ノ後

ニ寓シ神ト為スモ其多クシ又

字ニ能ク命自由ノ神

ノ如ク何レ也レ有レ体ノ相ノ神

ヲラシヤ皆レ其レ妙ノ又レ其レ思ノ

シ之レヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

其レ心ノヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

其レ心ノヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

其レ心ノヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

其レ心ノヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

其レ心ノヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

其レ心ノヲレ其レ心ノヲレ其レ心ノ

と論し、世界の大局をらんん、今後大なるは
政治上の司令官たるお前(まへ)の日本に於ては
去りて彼人の大なるを氣脈を過し、其素が結ぶ
の必要ありきと爲橋(なはせ)論す、候も之れを然り
と同じ、且つ米國に於て内政上大なる事ありき
世界のありあり方面殊に歐西方面を植民の
米國に今迄あるを後より、或る見
んことあり、或る見、之れを爲に於ては、糧
缺乏する、一層國中の物産に於ては、
も亦因り、論として米國に物えと、つ

リ、或る見、或る見、我邦人の植民のこ
きもの、或る見、今米國上候、横りる大問題
ハ、んん、米國の、或る見、所、此等物産の
の、或る見、の、或る見、終、米國
の、或る見、の、或る見、内政
斯く困難ありんば、日本を壓迫する、この
ある時、或る見、論、或る見、
利害大なるの、或る見、言、この
この陽性の、或る見、米國の、陰性の、
父、或る見、の、或る見、又最近英

米の純率を比較するに米の六五：對し英ハ二
五と云ふ如く尚あり、而して日米と米玉を比すれば
六五：對する一に多し、米玉ハ其ハ其ハ世界の
純敵より多し、法論終局に在りては内余
辭して之を

(七月廿一日記)

○例のことく圓者を坊万：逸り略ハ念心の方ニ
種をいひ、一ハ萬春翁の一松の遺書より、古
店ハ春翁の印入るるを私ハ其他を私ハ、極め
て價高く、印講三帖、武市地南の印講と爲す
一ハ行本、春翁の日記一冊、春翁の秋思と云

を以て送るの長々書(アリリ一帖)と稱ふことを
得たり、印講ハ多く他人の私印をぬめま
しむ、往々名家の印教見して未だ架下地印
ハの印講有けん、之を花して一の也、日記ハ第
二二年は、歳ハ日來りて、漢文ハ、おきある、格
外の記すあり、ある、名家の地を記し、ん、味
ち、以上春翁遺書のおれ、菊講一冊を得たり
此方養正菊法を主として、記すものも、昔昔、古抗の
身、瀟の序あり、其、尾ハ、海眉公の跋あり、●其、華
と云ふ人の刪訂本より、版下ともなる、べき、好、字、本、也

録中：進補して可也

○「苦種生甘實」蛙言「驅言虫」前此「浴爪」の
の差存る「雅別」を缺く「才二」を「任」に改む
て前人未あか也

○夏時庭池河骨水面を寒き涼味を殺く
池を殺して八九寸の河骨を除く、而して池底
底を長さ八九尺径を寸八九分白灰を斑
ちる根出づ卒然之を見んハ歌骨の如しこ
に於て河骨ハ「骨」の字あり「所以」を知る

○浴ハ享樂の第一具、古代羅馬も浴中享

と設け、浴室の側より男女同床の設備あり其回
り尚存る、惟だん温浴を以て快樂を以てせり
況んや酒と女の之を伴ふに於てハ享樂主義の三
要件一器具是も古浴を以てし、山本如壽
兄と浴と宗教の關係を研究しつゝある者あり
と云く或ハ「享樂」を連絡せん、我ハ天正代の
先ぬ皇座の浴場を衆人の垢を洗滌せしと云ふこと
き何事の内、浴場の意味ありや、少くも宗教
的迷信より起り、外観より見れば、或ハ外観以上
に意味をもち知らざるべし、

○八月より例の如く溽暑甚しく幾人と身体のせり
待つる困しむ、早起庭を掃つて夜後客に接し時
に北城新報のあめ、文林酒の行を起し、又時瓜角
の記念録の材料を終む、午前北城等の事、ゆゑ
と夫れと時の福を知らし、午後の供古を散策
訪り、回者を過る、此年暮の口や行きの二五
れも日あや、考る、晴氣満ち、購はんといふる、
回者さうく空しく帰ること一拜する、寸珍本の
こと、きき幾んど此五七得る所あり、午後の清
河のるる困難、一七編の撰、涼と納

凡●新のん書と漢文の二他、るる、五的を
と、ん、曉のの増促うる、こ、ん、え、る、毎
の娛樂こ、考、時今の口や行、或、或、或
級生活難、泣くの折柄、平の上、叙、如、一
あはれなき、を言ふハ、勢、評の、後、受、け、ん、歎、走
也亦是、こととを知らる、可、々、々、々
(○月四日録)
○高橋雪村の細長の画幅を、き、ん、と、し、ま、る、の
ち、解、せ、め、だ、い、苦、等、と、描、く、畫、一、行、の
体、流、ち、北、城、の、二、年、戸、隠、山、中、に、画、す
不、一、語、と、題、す、瑞、山、殿、の、別、紙、を、書、か、す、

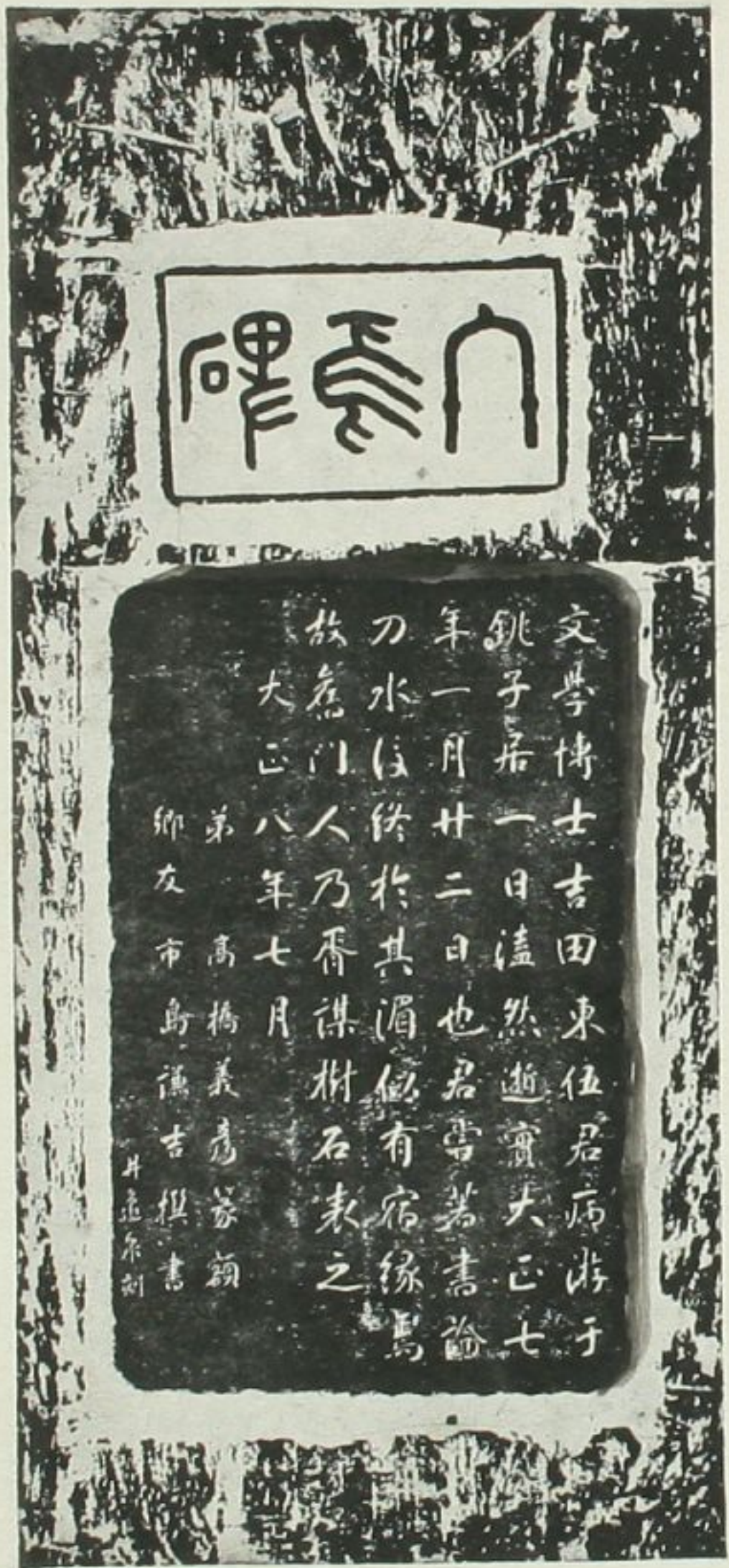
前月輝いともを別紙に改め、**新刊**
御書珠玉戸隠に似しもの書とてある
の奥七巻八巻分指動き毎二入る(四月廿日)
○今併に北陸を以て買出し、出づけは古碑松文巻
寸珍本十数行を紙の帯一束ゆ、多くは架中
巻するものなるも一二部活の方と春意本三種は
外、併に菊池堤巻に其の不在の漢印を捺し
らん、寸珍印活巻を巻し、紙より重きもの
七別達、漸やく寸珍本七種ある、日暮中
巻集と停止し、一斗煎をあるまじの也(八月廿日)

○前掲の瓜の巻年帳巻を衆試む、其巻の厚きを
細くし、一冊あり、其巻の紀念紙を掲す
る、あり、紙讀し、え、控をあるものあり、
今漢八巻に其の巻を治ひ、余の寸珍冊子を巻
直句にこんと稱せんことを求む、若く寸珍文庫中
のの白巻一本を存するも敢て妨げず(八月廿日)
新刊此巻を紙を以て刊行、朝集風巻と、正午
風巻と、若くは巻六のあり、併に校勘書後
分枝のあり人を掲押して、返付に書名紙
記簿をあるべし又
八月廿日録す

印材四顆を拾知し石川草の二刻を積ふ

○本通し印材の二三寸餘片を高くし其の形を
外に古義を印譜撰の印譜二冊の跡をみる
右印譜の山々々々死書寺にありんとするもの
あり古義を印譜に現在京都地の伊藤家
と花より遺印を都をぬめりしものるに高
手屋より東所とある印の數約百五十顆あるが
其先京都にあり伊藤家とあるものもあつた
し未だそのとを屋をりしうテン版と印材の
也

八月六日録



門 泰 碑

文學博士吉田東伍君病游于
鈍子居一日溘然逝實大正七
年一月廿二日也君嘗著書論
刀水位終於其酒館有宿緣焉
故墓門人乃齊謀樹石表之
大正八年七月
弟 高橋義彦 敬頌
卯友市島謙吉 撰書
井庄宗刻

鋤子に建設の成る田舎士終高碑一形并に杜方大眼
 左の如し。此の宿願に紀念紙に収めんが試みたる也
 ○寸珍ものなる集せる部と城内、各部数門に類
 おして其種を数らんば左の如し。世とてふ部類
 ハ女子に關係あるもの之を多しと俗者の感あるは部
 に入らざる也各部の：渉り字を三十符あり

寸珍本 印類部数

監 八年八月十日

任 一九 文 三九 世 二九
 史 俵 一八 信 考 二六 印 五七

地 誌 一〇 茶 一九 料 一八

詩 二四 俳 二八 家 考 二二
 藝 考 二七 回 文 四〇 雜 一一

古 画 七九 俗 曲 一一

計 七二四

六る種を七る種に増加する例を七多額
 の費用を要しし印譜考画冊：特に代價
 の高きものありしう故也 錦葉印林のことと
 一部をえる五十四の價あり名家画帖の如
 概ぬ十五回も三十回の價あり而して其等
 八倍なる最近の種考集中のものなり

○威家書丹其余の印譜を徹す夏時多くの印
を去りて取捨するに懶し乃ち架中より五光六艶
と罵し乃ち家花印譜四冊一帙を贈る。此譜箋と
家花印の八九分を網羅す、但し捺法亂雜、随つ
て汚んハ抱つて捺し、譜に餘白を存せず、此譜余の
家架中ニ丸蓋無キハあるを然んる威家ニ花
イも六可也永く余の紀念するべきに故也

○夏時午後兼東事無く無聊に堪くす散策
書店を訪めと帯巾とり、此方百〇書店早魁
中より印譜三種と得たり、皆架中ニ在りし

是より一回く其芙蓉印譜(多く伊勢の人粟田
寛の印と収む)、一笑軒私印譜、大正二年笑
芙蓉後百三十年祭典、丁卯都下印人の胥謀
り摹写版に係り巻頭應答字のり及、栗山の序
を載す、又函留居印須七枚を載せ巻尾に
墓石拓本二種あり、三、金剛山帰云来印譜一
冊、全刻の印譜架中一七枚あり、之亦四更くと
坊けり

○四五日未北似新報の为文林疎沃の稿を属するん
漫取し十数回の稿を作り漸やく百二十回に達す

の水数千の古冊をサシく選りし其の損害少く
か、不の濡れ本を市場に出し日書者日の入れに附
すとき、某書店の談に受けば、損害を多けれ
る古物の査定は二萬二千圓、火災保険に付
て、四千圓の過きやうと云ふ、札の書き本の書き濡れ
本を古物と云ふ古物市場の相場と違ふと思ふ、
實に大いなるものし、さういふ入れの結果
いくむ位なるものやと、結果をさげば千圓
位もさういふところ、二三百圓の價を附し、
湖鏡類、湖鏡類の十圓位と云ふ物も、さういふたむ

装釘の改修に多量を要する、さういふ
低價の版、さういふ紙の合、さういふ、紙を形
厄に覆り、さういふメチヤク也、さういふ文求、さういふ支
那、さういふ僅、さういふ元、さういふ二階、さういふ上げ、さういふき、さういふ
もの先づ、さういふ厄を、さういふ此、さういふ不、さういふ新、さういふん
他の冊、さういふ異、さういふ殊、さういふ價、さういふもの、さういふん、さういふ
多量のお、さういふ濡れを、さういふ強、さういふ形を、さういふ後、さういふ
たぬ、さういふら、さういふ

(以上五項八月十九日記)

○

卑俗な潮來が全盛

古雅な「やらしやれ」

地方色を發揮した娯樂的の盆踊は、も簡單だが其弛やかさに古典的な所がある、次の三階節は舊屋敷か、樋口署長が真尤きに許可した、其ら米山腰へかけてのものであるが、他各地置も之に倣つて黙許乃至公式に許可する事になつたから明日あたりからは縣下を擧げて浮かれるだらう、所で高田を中心として中頸城郡の

盆踊りとして

古くから傳はつて居る踊は何か、現在では高田直江津の潮來、西濱邊のヤシヤゴシヤ、神崎を中心の三階節が依然隆盛で板倉村邊の「罎子の袴」や直江津の「やらしやれ節」は殆んど跡を絶つたと云つて、笛、太鼓、三味音床しい原始的な「罎子の袴」は潮來節の様に雅然たる落付きのないものと違つて優雅な點で最も歡迎されるのだが昔は中、手、足、腰のコンナが至難で自然影を失て來た「やらしやれ」は直江津や高田の

遊廓藝者の間

て居るが却て下越や他縣へは高田の「やらしやれ」として名聲がある向にせよ潮來の方は卑俗な歌詞と踊りの忙しさで趣味には乏しいが呑込みが早く踊も簡單だけに猫も杓子も踊れる、従つて近年直江津高田から頸南一帯へかけては盆踊とさへ云へば潮來の様に思つて居る、西濱邊の「ヤシヤゴシヤ」は十二神を祀つた八社神社からの訛りである、之れは音頭取る者があつて踊子はそれ附隨して「ハア十三夜……サ、エンヤラー……など、

合の手を打つ

のみで至極弛やかにかつ又優美に踊る、潮來、三階節が右廻りなるに之れは左廻りで踊る手

優美な三階節の濫賜

が違ふ様である、序に三階節は最近では歌詞が大分亂れて卑俗になり其上間違つて唄はれて居るやうだから二三参考に並べて見やう、此節の起草は或名高い法師の説教を聽した善男善女が「出家さ」と戀をする……出家さ……出家さの御化山坂越えても参りたや」と唄つたのが初りだとなる

甚句踊がある

が土地に依つて手荒濱荒破、悪田の渡しがなきやよからうねまり地蔵や立地蔵……ほとけ佛に似合はぬ、魚の買買なされませ

閻魔前なる茶屋の唄……地獄地獄へやらぬは、さりとて閻魔のよてを引く

宿番神堂がよく出來た……御拜御拜の仕懸けは、新町惣吉大手柄

米山さんから雲が出た……いまに夕立が來るやらピツカラチャツカラドンガラリンと音がする

高い山から谷見れば……おまんお萬が可愛や、染分禪で布晒す

明けた上夜が明けた……寺の鐘打つ坊主や、お前のお蔭で

夜が明けた
わしが思はく繪に書けば……一
ちやう
一丈の紙にも、二丈の紙にも
書きあまる
藏の戸前で一寸出遇た……話せ
話せや語れや胸中あること皆
話せ
よい子だよいきりやうだ……眼元
眼元のやさしさ根性のよいの
に私や惚れた
可愛いがられた竹の子が……今
じや
切られて割られて桶のタガに
かけられてしめられた
盆の十三日に踊らねば……むかし
踊を始めた目蓮尊者の御意を
むく

東の山折角の御覧
み無下この歌うし
10 山田印

川邊城
也セノてえんもも用
るるる印扶をも備せ
節んも七の別る也
其東ハ地ノ字もも小
るもの刻し得るもも
不

○本年廻るその外行の者ありし備：由子に内女
三人の内の身命登山七よとよのあやう史印を母の
と京都：外と登山を果して又京都：こうり往
後七の遊をある、是れ六廻着旅行にちり
身命登山の記并：西京三の録列く六冊：録し
か精屋があやうのまう、海：る并録を二あせ
也

徳中尚は寸珍を漁つことを唐をさう京都
滞在の日一二の寺庵を漁りし架中未のあやう
二三の圖書を焼の、古書あやう初号記や子附珠

(巻版)のこときこいんより、而して他：珍本一を得
則ち石村函汰炭茶葉鈔二冊を一帙くとも
うと架中：七の教十行の内丸カ形のこよとも
北地大改收醫子のあやうを得るのみ、但し伊原
仁高の書屋を漁りし其の遺印七十の教
を親、あやうの用言抄のあやう寸珍印冊
ル仁高車屋のあやう此昨甲梅而あやうの印を
自ら採し二冊の古義堂印存を得る、こい
六の精屋中のあやうのあやうを採る、青竹に得
かたき、このあやう自ら之んを作つ、こいカカカ

を得たり蓋し此の印名と謂ふべき歟。吉田と余
の交るに幼少のを作らばきし年數に吹きよるに逆に
余とて七之んを作らば人生の度其に測るの
くやる也 (八月廿七日録)

終焉碑 陰幕の式七金と九月七日と決し前の
余高橋義彦と^子桃子に出張の縁定する式
後吉田と余とを二三の一使のみおりに講演せ
しあるは其のし准すゆも略し成る

○岡田墨仙の六画冊と出入の書画を収め、
七巻部は辨めべくしと京師に獲くしよ、併し京

都入在つての心持を辨入る、墨仙は京師画師とい
早く没す、杉年と同意のしる年のり人より、告
首に杉年の墨筆而墨堂の語をみあう画をみし
十一枚の山花を写す、筆致杉年と優る
者：ちう、十尺も望みし七八分幅一十三四分厚
紙の尺：ちうよ、杉年針赤白也、以つて墨堂中のよ
とみするは、便十八日也 八月廿七日記

○交る日中、午睡ゆり、竹の耳の母子に不精な
子松葉集の結末を録し、名る前中し成る、寸
路目録とせし、る中し此の二記録無る一のし、ハ

遠江の平井顯齋は、渡邊華山入室の弟子也、性敏慧、凡百工の製造、一見して之を摸製するに、妙に至らざるなし、曾て一貴侯所藏の明書を借り、臨摸贋を作り、裱装舊に仍りて製し、眞を留めて、贋を返す、後審視すれば、己れの留る所、自己の筆也、予曾て華山の風雨山水大幅を観る、筆力遒勁、墨瀟者潤、壯絶快絶の妙書也、主人曰、小華審定して、家翁の眞跡疑なしとて、藏匣に題簽せりと、予熟視良久して曰く、是顯齋の擬作なり、某皴某點、某樹某石、顯齋慣家の餘習ありと、主人信せず、其後、此幅の原本、某家に藏して相傳ふ、當時見附驛の鶯溪、顯齋に逼り、原本に依りて、擬造せしものなりと、此事小華に話したれば、小華曰く、此畫の如き、之を父翁の眞跡とし、支那有識家に觀せしむるも耻

ちざるところなりと、小華尤も鑑識に長し、就中華山椿山の筆に於ては、百一を失たす、然れども、顯齋の贋作には、間正鶴を失ることあり、之を顯齋華山と稱す、顯齋の贋畫は、能く顯齋の畫法を精覽し、其慣家の筆意を解するものに非れば、眞偽を鑑別すること能はず、小華猶之を失す、况や他人をや、故に顯齋の手に成る、華山の擬作は、眞跡と殆ど其價を同ふす、獨り華山の贋造のみならず、其他の名流の贋作も眞を亂るゝに至る、曾て大雅飲中八仙歌横巻を見るに、首に皆川淇園の序文、跋尾に僧六如の跋文あり、大雅草筆を以て八仙を畫き、其間に詩句を題す、三家の筆、共に顯齋の贋造せしもの、此卷現今價五百金と云ふ、以て顯齋の贋作に妙なるを知るべし。

○高麗須弥山唐興寺碑の拓本を懐く
ものを賜ふ、文章を換ふる、筆を録せり、然
んとも其筆法政陽通に酷似し、之んと通と云
えん、何人も異議を挿むを得ざるべし、余高麗の
碑も多く知らず、然んとも如斯く初め高麗の

所より懐く、水厄の推り変り剥落する所
あり、善し、文章を換ふる、支那の如く、
るく、此の畫、唐の筆、唐の筆、唐の筆、
わの、一也、價安けん、唐の筆、唐の筆、
○余山本非雲の画を愛し、架中二三を
而るも、今の古池の高らし、来り、如く、
を、あつても、也、此幅、臨る、紙を、
と、或くの、圓る、唐辰秋月、言、
あり、一詩を、題す、唐の筆、唐の筆、
し、此人の、畫、唐の筆、唐の筆、

見こるる耳を解けしむしか、其時或る石之
白物一石と指さし、此の石は、ゆかへを介を
ても歸くこと叶はず甚に困印すと言ひし
白物ハ執視しそえを介を加ふと云ふと
得ざるは、横る、こゝに介を下し見よと
或る石面を指搗し、さうつと、秘する介を
指定の處へ下し、さうも、其もさう、歸りけり
そゝ初めし石仰の石、さあしきことを
さうを、の、徳も出さう

桃子、暖、寒潮共、流る、海を、遊る

魚の程、能く、古きを、けり、し、名、あ、出、ん
た、す、と、世、後、さ、え、し、此、年、海、面、の、あ、の、夏
遷、ら、し、と、名、え、ん、す、海、脈、流、る
海、脈、群、を、あ、し、と、集、ま、う、犬、吠、の、一、寺、祝
り、し、と、櫻、の、海、脈を、放、ら、し、之、れ、を、遊
ひ、拂、ら、ん、と、海、脈と、名、を、そ、ん、と、あ、
早、く、来、ら、ん、と、海、脈、又、海、脈の、後、け、ん
る、あ、の、夜、る、海、脈の、あ、を、海、脈し、之、ん
を、見、返、す、と、海、脈の、あ、海、脈の、あ、け、る
ことと、款、せ、し、も、海、脈の、あ、の、あ、り、と、あ、ん、

とらむ、こん犬のいふを、得んこと、美十尾の
鱧を、剥りたるを得ず、其つに、教るゆへ、
まうと、しと、あつるま、いふこと、事也、
漁師の、毒葉、やん、あつる、もの、さう、こと、を、
く、やう、しか、あ、也

波も、華山、自殺、前、の、鋸子、あ、ね、い、ま、ま、う
な、と、ま、ま、の、何、年、い、ら、う、な、属、さ、う、ま、ま、
港、中、に、こ、い、ま、ま、う、し、日、と、七、思、い、ん、不、係
末、あ、つ、る、ま、ま、こ、其、ま、ま、家、の、利、根、川、
記、一、ま、ま、う、あ、つ、る、ま、ま、も、皆、鋸子、と、松、を

心、の、ま、ま、也、此、を、この、物、物、こと、ま、ま、但、比、つ、
不出、と、ま、ま、を、以、り、を、ま、ま、見、る、能、い、
り、しか、淨、因、寺、所、存、の、古、書、冊子
一、冊、の、あ、つ、る、一、巻、を、得、ま、う、内、の、華山
の、あ、つ、る、一、巻、を、ね、い、熱、湯、屋、と、編、ん
船、波、上、に、あ、つ、る、ま、ま、を、書、し、御、向、を、
一、巻、

三、三、と、ら、ま、ま、と、こ、う、ま、ま

世、の、あ、つ、る、ま、ま、
波、の、上、に、ま、ま、
人、の、う、ま、ま

のわら画

疑ひなく華山の行路難を言ひしは其
波のうき津に觸れたるもの何れかの書
作あるに似たり。此冊子の中は半香琴谷
の二人の画も扱ひたり。華山と曰ふ未
りたる別れ。今めりたり。華山の鑑
み。第一たる寺は威徳寺といふ。智恵の
を駈のたるものと思へし。此寺も其作も
作者の取らるもの。若干ありと云ふ。威徳

寺は今も美濃道しと云ふを治するもの。寺
寺は無きよし

此画冊と云ふは洋田寺に印玉甚重と云
い形跡の地。古来文人墨士のありたる
多く此寺を治め、造りし冊や多くは此
の寺跡と扱ひ、今に此のし。此の
のみと指くんは左の

印佛 彫音 墨墨夫の 栴舎

一茶 華山の行路 一茶 南湖

華山 半香 琴谷

一葉の依り云々

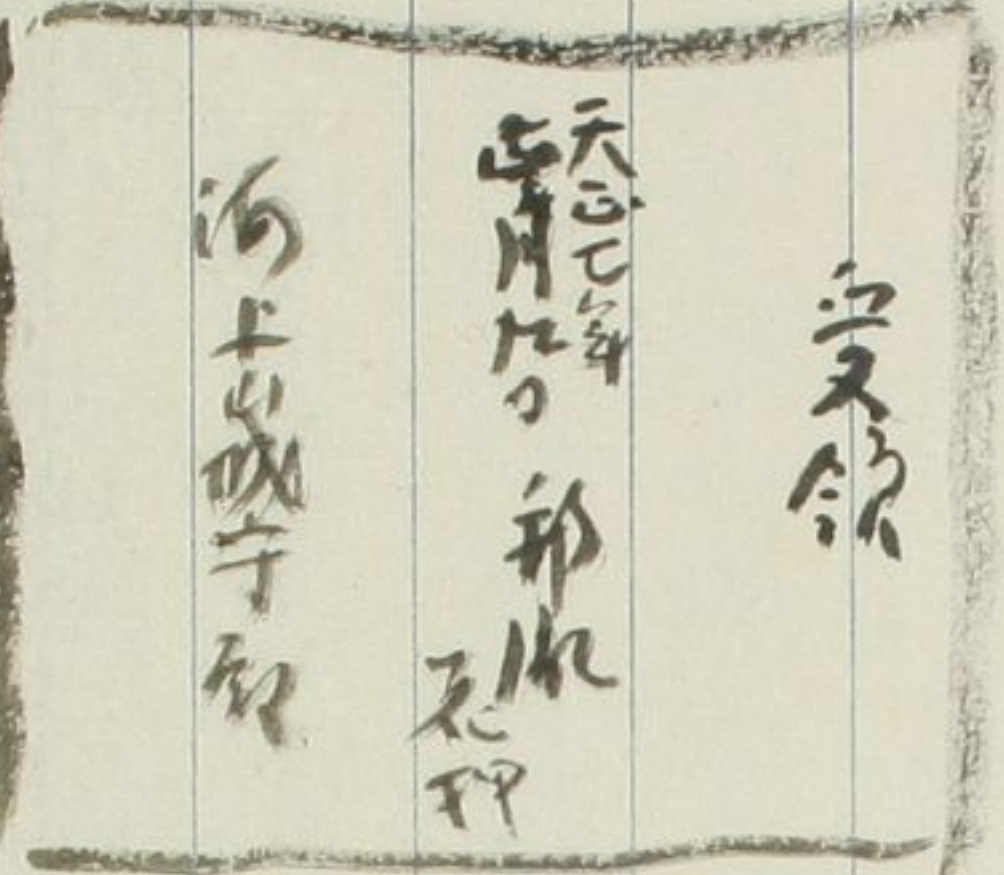
此方の清風こころ
心清しく

西方佛土かかるとん
一葉

ふとぎすこころを去ること
遠く

余等の鑑子の如きなるを様々し四家の古文
者古記等を陳列せし中におかしう感
ぜしもの二色あり共々松本信く他の
所蔵に傳ふ天正前後の文方なるものも天

正七年の文方なるものあり



いんをなする印あり

下し等能令の一徳あり

形光りし此の形式と

板の跡ありしと又

るの跡ありしと又

見と板ありしと

まひり

他のことありし氏政又ありしと法海上也
十三三竹の久しとありしとありしとありしと

を抄と名しすの文を尋、此の抄を抄と名ふ
江川酒と名しすの文を尋、此の抄を抄と名ふ
門をもと徳酒家と名しすの文を尋、此の抄を抄と名ふ
出で、此文者の如き、其傍語ともるる、其抄を
也、江川家の家名殊に居らるる、土河の抄を
一匹の如き、此酒家の面白を尋する、似
たり、日家と名しす、土河につきて一程の解
釋を興へ、その名も、多分此酒家と名し
る、抄の遺地を尋する、うねる、此文
者、此の味、抄を興味あり、(九月の記す)

の今昔の類、歸して、前時時記の句集、
房して左の一考と名しす、

野はころけたる南風なり
身をくらくる大なる楓朽
九きとひととを、つこちを
あはばや、望し、くちを
玉いぬ、いまその、海を
あすまん、淡雅清の、水
高の、まき、く、飲養、す
此地、へ、さう

寛平延喜の頃の歌よるんときんり、何なる延を
の次と鑑よるやと云ふるは前田信音家並に徳前
蘇峰家おのり秘府略と草紙改回しして其の秘
府ぬり首面は延喜の文書あるあるは引く推定
するに、此の古歌をのぶる廿二巻と云ふは四中
幼武衛の巻と前田家のと云ふは、いふを
帛巾のしるしあり前田家のしるしは信家の
二珠に此の二下をうらう平古止點つきあふ
引くが新上の巻と云ふは、女のみあり、荒しうん
此をと考ふことも比較よるは、幾十個所のお

事ありて此をのぶしきこと歴こらう、流布をこれ
との異同比較に解説者中へあり就てるる
一
の意上人の歌集を上人の身文行の撰輯は
且、全部片仮名を方ききものことと考ふ
し、翻けあり形は昔前田の抄の接尾
す、の意の巻中うらう歌集をむすむと無き
ものもさういふことあり、これをうつる初めは、こ
ゝろ作し木代家の考證一冊添へあり、編定
時代の史料は、いさゝか教へる

この條約を破棄し得る國際法の多別を利用
獨逸の租借地に關する條約を破棄するに於ては
の山東に關する約束も破棄するの伏線を作り
ある大統領令を以て之を宣言し公布し英米
の對其の意見を直説し得る而して日本のある之
の目的は既に殺し得るなりと云ふ問答付と
云はざるを得ぬ彼等が地の伏線あるに於ては
和合戦に跳梁し一時の列強として支那の言ふ
所を耳を傾けしめり然るも其を敵の如く
し條約を破棄するに於ては日本に敵を以

この條約の租借地を破棄し得るに於ては
之も亦や然る物に屬すも此の如くは
獨逸の貸借の條と云ふことと對等の關係
にあるに於ては獨逸の領土であること、然し
十九年日本存心は地を土地に於ては
如くは然るに地の土地に換へると云ふまじの
約束あり其の言ひは獨逸に讓與せ
んが地を、善悪の關係法の例を以て拒ま
可とする也、山東に關し

日本が山東に於ては此の主張を容れしむるに於ては

引上げんとす時英米佛ハ今も困印ハ今も
らし先々伊あう引上げんと三四ハ之れに飢う
重キと措く事無し 伊と云んハ伊古の●撤退
ハ困キ根拠と云ふして事あるが、為り後帰
を期待せんらんハ也。●而して伊の撤退は法を
日本六の極の事とす。●然るに伊も亦
を固めて後物をせしこととす。●其の
や里をやら相救えし獨とる獨海を為す
然る果、英佛米ニ動し一種の事ト對抗
の事の起らんことを云ふ。●さてこれを日本の

進退ハ重キと置き日本の説と聽従すること
と云ふなり

勿論日本ハ前々人種平等論を主張し之れを
せしし廉もあう、再ハ其の主張を措くの穩
う口をくさる。●こと英佛米ハ今得て見し
も困る、●人種平等論ハ實ハ不平等の
こと●ハ處有り、多くの種族を包含する
大ニ之れを是認する能くするハ其の
にも有り、●其ハこれを日本ハ後々人種と
其の二字を國民平等と改め、保し

九に彼オカ之れを為すや如丸のりささる、後等
之と見しヨキを疾視し且つひとくヨキを食ひ
ふり、日本に終る迄名を産腹するもいんし
中むひり、山東に欲するもいんし、白濁の
さうりしも皆なる因り、えななる、英玉の
坊の如き特に早も人に視せる哉、厭ひさる、柱
うらまゝ、やまゝ、か、いんをゆつて其の一端を
言及のとゆへ

此の井上、休養の功成り、次欧米を世に視察する
活法を、的るすむじ、誠みたる中、いん、

この二三

白耳義の柱と有カるる、二坊、獨逸のあり
まゝ、棧橋、おと、おと、えと、居る、職方、
二坊の前、いん、備へ、聯終、て、た、
斯く坊を、いん、の、知、得、
境、を、え、川、お、ち、行、き、
併、り、す、自、由、の、こ、え、
掃、除、を、え、に、扱、
し、獨、こ、七、後、
七、こ、階、

りて支那に渡りて是るもの惟これありて余前
年京都と爲し、後友人に刻意し、其後後
人と斃し得ること久し、郷里にて後すましく
稀觀の中のとらう、此く其の印全部を
印せんとすとの言あり、其の他人の石花、烟
す、世々遠きあきまふし、誠誘をゆること
或は登り難きものありん、頃有偶こを部を
危るものあり、價より刻意するもの可也と云
ふを以つて誦を價を聞くは四帳二万圓と云
ふに遊むし、且々念と傳ちるん、幸いなり表すの價

神と再考中河、翰籠するものありたるす
田とを辨ひつゝしを得たり、前年得たるを七
十圓用ゝしんんを二倍以上の價格也七
月廿四日録

○美河師室の正傳を考き、鑑景作の意の同
と致すもの延寶版をせり、これより考ふる
鑑景とあること、善通の作を後の中人物添
えり、さんを元祿に改刻し、其ぬる七改刻し
人物を添きなるものあり、善通(即ち丁んが寺)
に出るもの人物版の七のさう、さう山田師室

正面圖



(九月廿九日記)

復如名倉之松を復如名を測みんと欲し延寶
 版と其及の版とを抄るるす。猶是比較する
 傳り方歴代等、延寶版すことと其珠と云
 し、此書核證以て之の凡例を叙し其一冊
 云

(九月廿九日録)

○初吉南郷士終高碑中碑式を考ふる為過り
 鋤子、跡なき際同行の石塚松林と撮影せし
 めたり。影、今も郵送し其うたるに、二枚
 あり。甲乙二枚あり乙を山上より鋤子口を撮り
 此圖也。地形の大概此の字を以て略し之を以



○今頃利達は江戸宿より左の二回を掲出す、
江戸市の鳥瞰圖を心り得るを先河橋の
見物ひる法果こここ記念を収め

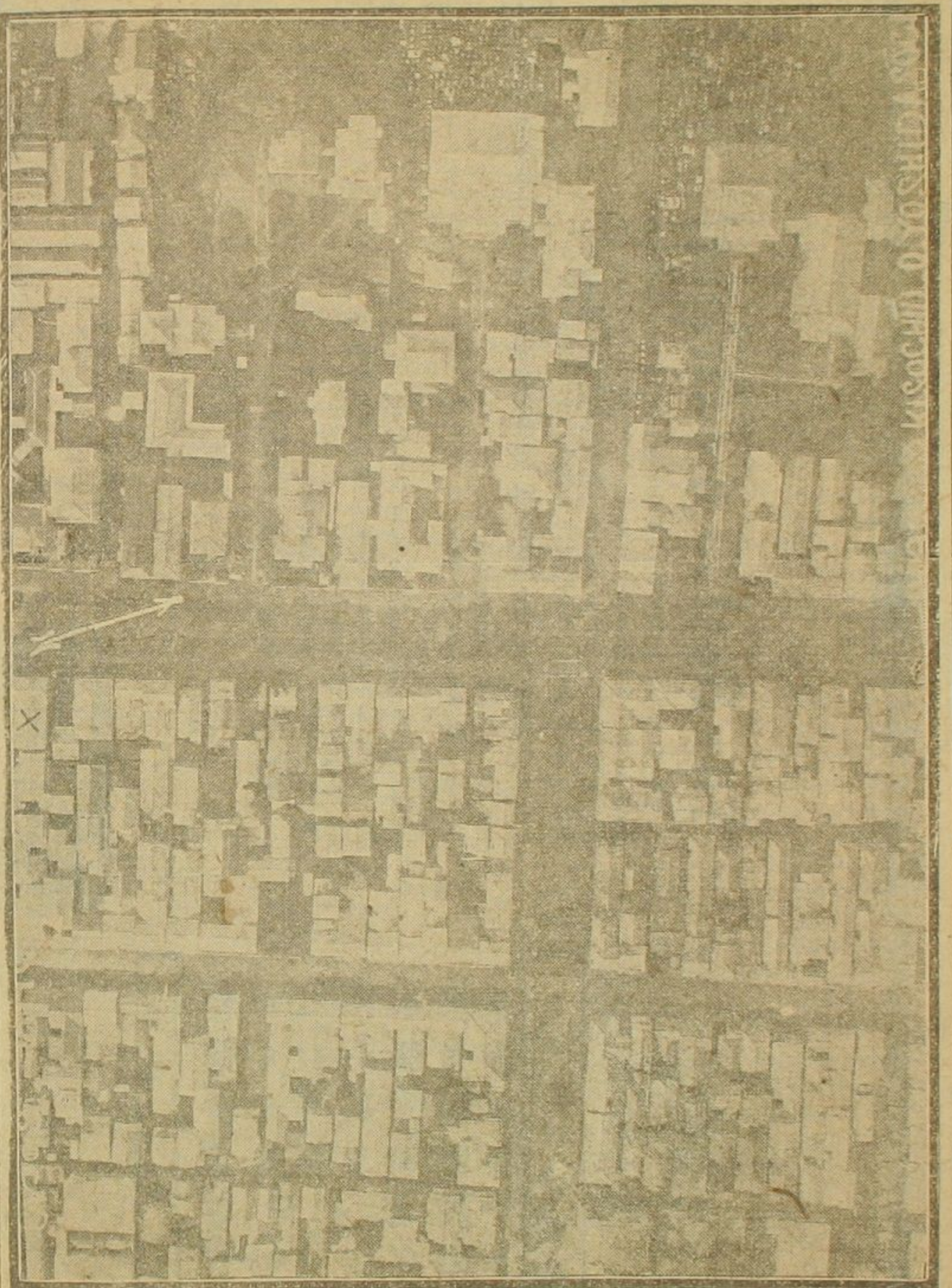
九月廿六日記

○城の道邊を歩みよむ其の古き所は法華堂
邊の法華堂松原と題する脚を心り
んと其の後行院はもとよみて例のこ
くおちろく法華堂とてまゝ日蓮の御心を
この流のほとけをみる、而もその心を
おちろく法華堂松原の法華堂をみる

留中階附不命申られ又第7中出されつゝあり米質は昨年産米より何れも

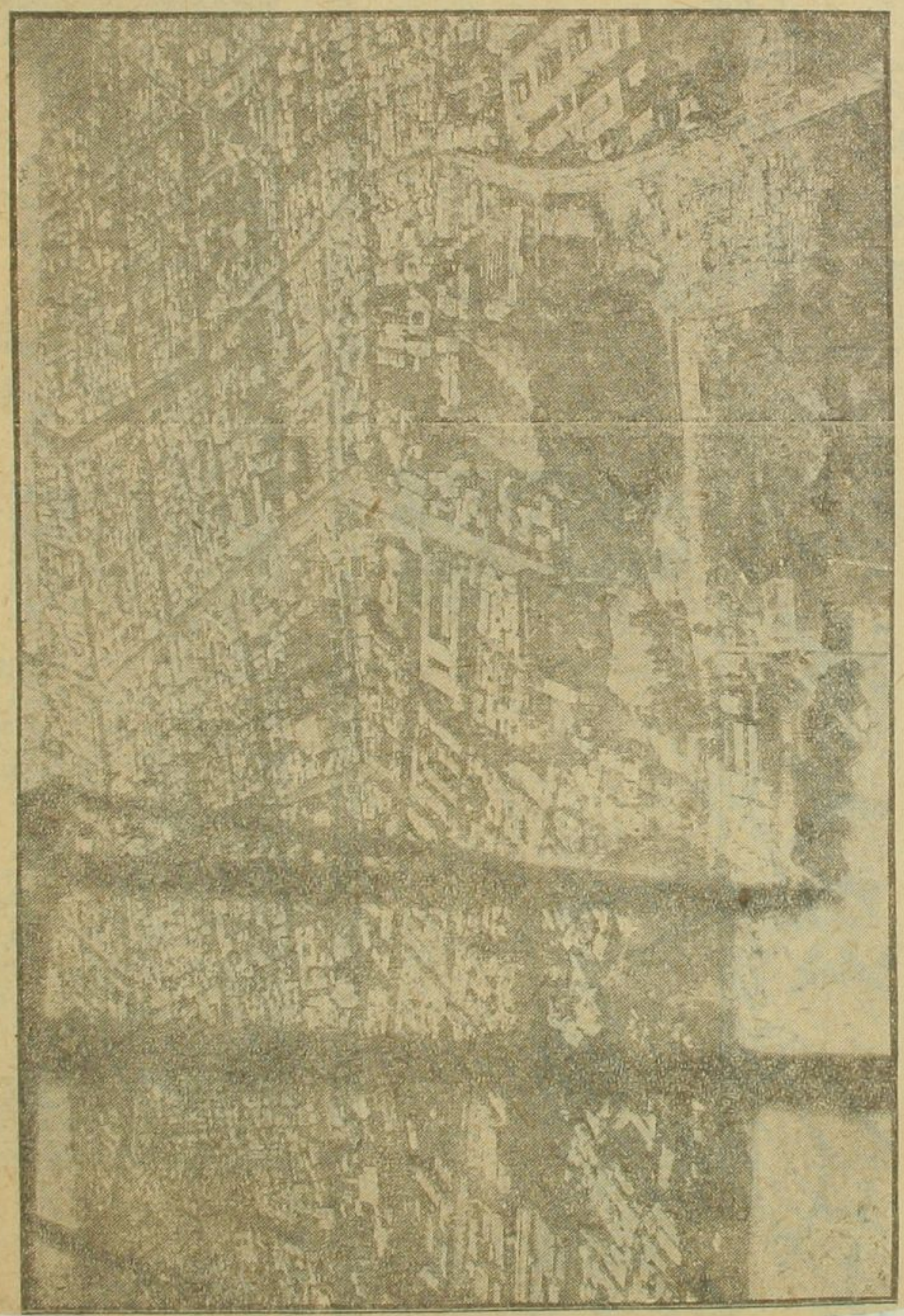
空から見たる新潟市 (一)

廿三日前市上空を飛行中機上にて撮影せるもの



西端通七番町、横の通りは新堀と南濱通、×印は本社、白く線を引ける如きは正幅寺、點は墓石

(二) 市潟新るた見らか空
 著るせ影撮てに上機中行飛を空上市前日三廿



左端の大通は舊所通、中央は榎谷小路、上端は高等學校敷地、×印は本社

是の著眼を流石と賞し、あつたのめだつたの著
を撫さき出すも亦可也。道遠の東儀城の二
九と一獨ま楊の別増三三んとするも方り美
あり御を日の無き折物、佛の地業に思ひつき
今、日蓮は東儀に元中ること勿論也。三葉
七のろくとろふ……此耳道遠也。この御を純物
さじこ上とんとするにえづ皆の業や道りの
か模利土を心くしむ目とを例とすと種々
玩具のこときことを出し且示る中は実相
割中の唐船の模利七二程出来しあつたせし

たしく感し、西洋のゆるる模利を心くこと殊ら
しうとんとも我邦を心を道遠を心く社と
ある……道遠又此の心の傍着敷を傍り心
りたるもの教本揚げ示る。皆多る名流忠の筆
なるもの、此程の女の誠は保ふあつたまる
思ひそりしに道遠の氣のきき、何ぞありの
事也……此耳道遠の著集し、種々の浮
世縁を又たう、奇高に連接する、友振のる、類と
して揚げあつた、海も二三おもろく感し、七
のあつ、今一々こゝに揚ぐる、煩いしげんは

者く心、その見ゆものよし意ぶの收味をさえて
る。四改の筆々成る後、その似顔傳うし、四改
ハ初代を四の門人とし、如何なる名人なり、寛政に
の終るを、何と較べて清くし、ぬるもあるものなり
か、何れか、幼る花千うし、後、そのまことさるや、
是のまふ所、極んば、亦、四の画風或る時、世代
に变化を生せし、か、その变化の時、人々をいんじ
ると、以て四改ハ、まんと共に、棄りしことしと、説んり。
此、今、漸く四改の手腕認めん、其、本、と、成る、版、終
の、價、甚、に、高、く、う、う、と、七、割、に、無、し、と、を、い、ん、…、(道)

道の、交接、河、の、型、と、外、四、物、卷、の、ア、ヤ、ッ、リ、人、形、一、個
平、し、あ、り、如、何、も、果、然、の、ま、あ、る、ん、を、彩、色、も、去
じ、美、さ、う、**上、林、何、れ、の、四、の、ま、の、こ、を、河、く、ハ、ジ、ヤ**
ハ、の、七、の、と、ま、あ、お、せ、う、ま、い、ま、あ、也、(九月、廿、六、日、記)
○九月、廿、六、日、記、の、南、の、改、部、本、書、肆、の、聯、合、を、ま、ま、
な、り、行、て、四、改、と、改、と、珍、く、し、き、ま、の、終、て、無、し
寸、珍、を、し、え、ま、と、思、ふ、七、の、一、七、う、し、十、二、三、は、猶、心、得
た、ん、が、皆、案、中、に、無、し、と、ま、あ、ま、う、え、自、不、り、あ、る、を、
唯、九、渡、村、花、の、う、し、生、前、其、の、人、と、せ、し、流、刊、せ、し、彫、畫、と
送、累、を、し、七、冊、印、本、本、四、十、と、も、る、ハ、冊、を、し、六、十、六、冊

傳きしを得るに幸ありし。外に寸珍なるに佛名も
梵字帳を得たり。これら振をえし正書七附しあり
佛名の方の面目を見らば七の字。余は此の
人の筆を振る。其の筆を始り。既に得たる七の十教
帳あり。此佛名帳梵字帳也。又其の二類は加へば七
の也。

此の市に於て格おのものを得たりしが却て他二
三の跡ありを獲たり。内二程り始りてありし

天字つんく字

一冊

後見あり。倣ふにたふありしとあり

はものこはるに古書にありし見元祿以
の既あるも。其ごとく古本又擬し
るものあり。其もを見し。うすの春
に此の古本を載る。其もに七も
終りたるありし。けいん文化の七
のうすんと記あり。或る然らん。余の
獲るを。その題書を測る。其書
の書山をえしつんく字。●と花あり
記し。其をえり。或は書山をいし。就
ちんこ。心りたるものあり。おのりし。其

異日るんば此に於てあるもの既味の
且つと後なるをいふ事案摺こ

・ 洪有鼎古牘

明季鄭成印の古牘に從ひ後りんと
しるものに洪有鼎字の大小といふもの
あり又の印義の古もあを以て將の
者：珍とせしむ。此牘を也とて金屬版
に附したるものこそ冒此の四字をえ
り字あり(牘)と云ふ事古の
毫の毫の故あり、於宋の原の
不

・ 通言解

戦後の儒小田穀山の著こ五卷中七
此の叙と論する時此をと論
披考すは終に得たりしもの
流に種々ありしを故に付解
況を分くる若者の之を流をえ
者中継り天愚孔平を云ふ事穀
山と孔平とありし關係ありしや
多の事ありし穀山と孔平と

へくしく此者七孔子の著のじよとくぬ
奇樹烈の著也

(十月三日記)

○瀧西とて田舎板田豊橋出東より高野と余が
記とて一ツ橋時代大なる田舎屋を下谷の伊藤
収とて一ツ橋とて四谷の牛田屋三河屋一ツ
くう飯とて牛田の橋とて二人渡り
よとて他とて没交遊を興味とて且つ物とて
まのふ後とて早く酒ををうること雨とて

とて一、此れも物と料理をこつあきとて、植田も
陶器もあつて余のこつあき一別此年秋分如
余のこつあき、屈指とて大なる、の在るの、改
早の節年の著、初め、初め、余一五ひ
何人も、誰何ん、廿二、笑、信也
此の書名を

津道春水	関直彦	望谷景義
伴 達	楊公直	根岸鍊治
香波祐吉	平田徳次	上野徳太郎
坪内惟虎	石河敏一	高田早吉

此方二枚をすまゝにまゝに、便又四とまゝに、珍をの使也
(十月の日記)

ついでに、脚を
のり判入因り

此方判形の
引札を二枚

す平凡らん
と名入の注表

と名入の注表
と名入、又也



頃、此方判形の引札を二枚と名入の注表と名入、又也

もの
ろう
こん
せん
せん



の休谷を去りて、南東に西比利亞のオルクワラと視察旅
行をせり。地味極ゆる其の状を述べ、彼の、旅行の事、
その密着と表とす。その、然れども、四の、旅
行の、困し、み、な、り、と云、彼、外、國、後、を、扱
の、密、設、科、ぬ、の、新、に、さ、を、三、十、数、名、の、内、に、加、へ、り、
比、利、亞、駐、在、中、隊、の、特、別、後、援、を、受、け、て、旅、行、し、る、七
の、人、も、氣、候、の、激、変、と、飲、食、の、不、便、が、一、行
中、病、ま、さ、す、の、一、は、ぬ、一、人、を、三、四、の、死、に、あ、す、る、生、に
り、と、云、ふ、の、長、い、旅、路、の、分、を、お、と、さ、し、る、日、本、軍、隊、を
十二、三、番、へ、し、米、四、軍、人、に、僅、う、ん、七、千、人、を、()

る七千人のの、日、本、軍、の、一、つ、交、り、合、ふ、偵、察
者、の、こ、と、を、警、視、者、の、こ、と、を、戦、の、日、彦、の、日、と、云
つ、て、部、隊、を、と、り、つ、ら、う、米、人、に、ま、く、而、後、洗、こ、
す、を、い、は、す、の、中、へ、の、い、は、す、を、と、り、と、い、は、す、の、こ
の、こ、と、を、日、本、軍、の、不、利、と、し、米、人、に、洗、手、の、氣、候、の
行、動、を、と、り、動、を、と、り、い、は、す、の、こ、と、を、い、は、す、の、こ
中、隊、を、絶、中、に、米、隊、の、視、察、の、下、に、ま、ち、其、の、お
手、と、さ、す、の、こ、と、を、露、軍、の、小、説、の、い、は、す、を、い、は、す、の、こ
を、い、は、す、の、こ、と、を、米、人、の、旅、店、の、状、を、い、は、す、の、こ
或、ら、而、後、中、隊、の、行、動、の、偵、察、を、い、は、す、の、こ、と、を、い、は、す、の、こ

○例のこゝに圖者を添へたの二者を得たり

印語解妄

一冊

福言者弟著の如三十二年(圖)華社出版
ふれども今の足る人初め也日本古畫の
畫印(一)と(二)を著す者著くは其集
るゝの誤りの多きを正しむものなり
古畫鑑賞の参考とすべし

和歌世話

一冊

和歌の歴史の伝説者初記の振起を
其解のなるものなりと振起を

細井春樹の撰述の考法の方こそ、此書
ハ春樹の子九皋の自筆を以て
巻尾ニ府君の真跡を未だのめ
め奪ひ去らんやうに騰写社寸
寸尙ふとあり、無界本を全文朱筆
に信洲を附しあり、市川百重の
花記あり

一 古のき帖 文化五年刊本

野の三才と云ふんは、よの子が河のま
淵に代りて、あるやんことあるまぬ又の海

名平なる考まは、消息又のよの子の考は
千石の考と標榜して是を考まらん
是の考も其考を、真淵若の考は
の考も其考を、よの子の考も其考
似し版刻の方の考は、映言しを
由記しあるは、よの子の考と云ふこと
も、よの子の考と其考の考と其考の考と
其考の考と、其考の考と其考の考と
其考の考と、其考の考と其考の考と
其考の考と、其考の考と其考の考と
其考の考と、其考の考と其考の考と

詩と歌とをよむ女の世余り得た文化
年刊行の初編をこゝに集めた
のゆゑ加ふる敢て妨げら

よりのみい帯履堂一の姉とて漸く
よる後片とる涼日波を系を

八年一級あり

非方家の書牘を集めて玩ぶ七一頁つゝ丸を考
のむい格致非方家の書として見るべきものあり
其方と方家以上の女の母多きこのよりなる風格
と氣類ハ方家の趣とる所あるが、此程の書

ハ或ハ向字ハ或ハ里字に似る傳ハそのあぐり
とせんといふ臨池の模範として習得の
ニ其洲米尾の如きあはせん目用ひえ
お、方の意味あるものハ一概に反邦古法帖に
あはせんハ願ひする傾向ありて非方家の墨帖
ハ一筆一筆二束三文ともまふべき場ある
地位あり然るも意味上からいへば、そのく
し筆を執るものあり、そのハ此程の墨帖の
漸やく母にむけ行くを概し数日來稿の可
るものを蒐集し終るゝ非方家墨帖百程

鉄子理今

郭少糸

王治梅

衛鑄生

宮原就

深江春

五 忌

谷口 福山

直入山樵

村田香光

長三河

易堂鼎

湘 瓢

拜山

吳 塗

海路王道

北帳の題茶

家

北帳の首

銭多野物字多

壽同全石

ゆみ

如意火

米田叟

耕 石

而 却

胡公壽

信天翁

水 香

市打

江島六江

張子祥

柳 橋

陽 谷

乾 堂

胡城梅

冒火如意火の題字多

再生の梅

北帳の題茶

真如月影 直入雲

ソ 三十家

えんきことよ ぬるりの政印語多 巻中寺田

定の方とあるとえんか 掉月小寺田姓の人よりある

ふへし

北印帳 全十四也

紙て三の又法神をさき 浅倉尾 畢帳を通り

中にて村佛尾の二王帳全部其の御作又と

七條七を悦おし給もの二冊あり 文政十年十二

月数り伝言の没此しること其の題後と因つて
る。巻紙に二王傳を二枚と附す。蘭思亮傳書
了所也。古傳を佛毫を以てする所は二傳を兼てし
取て珠とす。其の遺るす。其の又々を此書家法
書の内なるかして可也。別り珠に入ることを云ふ

○三四の年例のこと。圓方を造る得る下のもの
吾人多く之を。積に稀なるものをも存ん。左の如し
一 畫道手引抄

中林沖漢の著るる。自書す。を刻し。其
かのまゝ。皇朝梓といひし。之が

一 傳真秘要

漢文字を人お論を基礎より
而彼の畫とと方と論に於て方と

一 三玉の傳

望月日玉燒糸。兜鉢の遺印を
指し三玉の傳を附し。其の
三玉の傳を附し。其の

一 下野天の傳。前碑銘。二枚

顏真卿の字と集めたるもの
伊豆中根荒思撰。又天の二年

所刻也

一 経史子語録

一冊

土井政房牙偏する所より経史子語
る則つこの説をお終しなるものなり
そあり也

十冊本才記

一 集句潤物百首

此書未詳

清人の著し附録に百首を録すする
なる首也此首は撰者の自序の如し
そあり也

10
山田
甲

一 林村一夢

の江十六年活字に印しなるもの余壯年
の頃愛護せしが爾年坂倉路へて
兄利今も善庵と云ふん此書と
あり其の部数のかつてし木村
茂舟の評文あり也

一 善門品

一帖

版本に大廿五圓の介

善門品

小抄巻四におあつらひのもの也

・酒中抄 和刻 二冊

此考支那の書物中へあつた單行を二
紙しく思ひし。形く得たり

・饌書 四巻全單

羽父蓬翁の地考甚稀なり今得たり
八四冊本の中四冊にこんを収む、他ハ西上
海事流傳不盡子孫志駿城志の三冊也

十月廿七の記

の寸珍圖書ハる種を達し二書十紙と徑も得る所あり時其

努力傳ふん西程と得たり同く善門る同く繪本數部他三冊
曰く存抄冊子同く以迄帖二の二、存抄冊子と山中位六紙
の詩畫帖と在るに所題帖と三帖と其首部と跋尾
の所題二字あり依るに帖の名と、此帖も現下の畫家
の繪をぬむ、據の中古繪本華村芝田玉淵、才あり、所畫を
愛する人も一帖ありも妨げあり、唯此の等の方画帖價
甚に廉なり、二帖に投する所あり也。

千程の寸珍をを得る實に容易なるが然るも既ハる程
を知り二冊と得る決し難しとを言ふ但此本年中寸の目的を
達するを難しと為す耳

唐の家にいんと想像せざるを得ざる也。但し余
右の印譜の序跋より一言此の唐の爲の
事なるに及ぶ。思ふに此印譜の前に作り給ふの
歎、印界人多しと云ふも未だ唐の爲の選全
部を刻すべしと云ふものあるをやうか。元祐
の真に斯界の記録也。不知此の印と印譜
の何人の手筆を帰せしむ。高橋はる也十四日
入札せしめたることあり。而して後札の結果は
未ださくくあることあり也。
後二書は
十四日
札あり 十一日四日録
○大隈家に往年を在しし唐元祐の漢字の書

あり前年よりそのお史の注を心んと甚幸し
漢書漸やく成る終るを齎らし来り示すものを
見んハあるも詳細に涉り給ふものあり。恐らく漢書
の逸一をいん。余曰く日本外史ハ七と改記也。通鑑ハ一
束して纏まうたる一部と云ふん云々。うしむこと
大概又唐の家を花する。文者に照らしむるも
此の文者も山物う子考も其つて中初の設計も
亦し給ふものあり。行して一稿なり。しと注意し且つ
既馬津教本の親終の教中一節のをお史
と尚もものを申し示して云く。こゝに猪飼教本の

世に外史の編纂制を以て将門史と呼ぶこと
ありしと山陽の注を以て二節あり、おぼし
と卷を以てすべしと勸む、元吉を文章の
方者も教書の二節の事いふらるし、所
に此の注を以て深く謝し、元吉の言の所
を二三左に叙す

- 一 ~~山陽の~~ 山陽の注を以て深く謝し、元吉の言の所を二三左に叙す
- 一 初めに論議を書き、本文又終局の後加へたるものなり

- 一 山陽の注を以て深く謝し、元吉の言の所を二三左に叙す
- 一 初めに論議を書き、本文又終局の後加へたるものなり

- 一 外史中に頻りに用ひある兵衛、皆蕉氏筆、兼中井所載の誤らうと云ふこと
- 一 惟是第中井山山つと云ふこと
- 一 物のお中、遠く及んでるものと評し、やうと云ふこと

- 一 山陽に宋高公、外史を求めんことを

○北を永く為し之と家十一月より午前三時
終に折去の電報丹其家より別録日記印
を伴つてゆき、其葬儀を営み、其埋葬を
りし、其詳細の記より、日誌に採し、其
に并記を、他の所を、別と記を心と
とを期す、こゝより、物事、の終りを記す
のみ

北をの名の初め、茂と云らん、う、後、其、壽と改
め、ん、り、右の名の、揚り、所、い、今、ま、い、い、と、し
か、丹、其、こゝ、す、け、ば、北、を、の、親、の、壽、茂、と、云、ら、ん

其の二字目の一字を、取り、文、初、名、の、け、ん
と、然、る、ん、ゆ、軍、家、の、茂、の、名、あ、る、ま、差、合
え、其、の、生、父、の、名、の、一、字、を、取、り、壽、と、名、乗
ら、ん、と、す、り、と

北をの生年月日、何人、古記、読、ま、い、ん、ま、も
周、り、な、る、か、い、幸、ん、手、匠、の、中、に、脇、の、結、係、の
し、あ、る、その、色、紙、に、四、月、廿、四、日、生、誕、の、事、記
し、あ、る、な、り、其、年、七、十、六、才、と、逆、の、葬、す、ん
ハ、天、保、十、四、年、一、月、廿、四、日、同、年、弘、化、と、改、元
あり、其、ん、ハ、北、を、の、生、誕、の、弘、化、元、年、四、月、廿、四、日

あ、

此の二代目佛の物語すること所のて中一
以後佛をさうと各地を巡錫し九河の果
七経廻り、別る家の土師をまうす、之
れを地へ埋めし建てさう、観音をさ
とさふ又地をを建てさう、大石塔
をも設けさう、各地方に
る御札を納めさうと覚しく是年
塔中を捨せし時由教のおれ現
やのま九河の寺々のおれ七ありさう

し也

此の二代目巡錫後觀音の中座の座
に柱して家督を嗣子に傳へ佛三昧に
歸生をさしてさう、其の後其の位
とさう、座名をさう、法名とさう、
然るに其後二三代と傳へ此の生父
六佛門の今中座三昧をさう、
さう後三途俗の家を傳へさう、
さう、丹美家を傳へさう、
二人前後二人あり、此の生父七俗藉

二あるにたる因縁うらむと歿後法名を後善
門院と申す。二代目にはあしと申す
申すすうとぞ
此ら（書）北巻の法名を乞ふるに廿余
善提寺淨念寺に圓りたるに三ツ斗りの
字を遺ひ示さんたるを又法名、佛光善
の字あり、善門院も、因縁ある川と
名をとり

深原院龍虎の書

と稱す（書）こころん

丹善家の歴史より今とさうして此の地七
百一前迷三代目の事親言を善つ座七
石書改染おのりするむ今の丹善主人
皆北巻（書）の地をゆく所と後々二代
目七代後（書）の才略もあらん歟、丹
善家の全盛は二代の隆うし歟、思ふ
礼も二代の西博多へ京都ありて豪
客と称のこころん、家運傾きたる
のあし
丹善の姓を七と丹後する所、徳川氏の

志中りの丹後守を名乗る人あり、そんと同じ
きと名あり、あつた伺と云々、吳の字又改めたり
と云ふ

丹吳の家譜と瀬波屋と云ふ、こゝを祀
ふ因もある由り傳説あり、す家の中残るを
安能が瀬波に誅戮せん、後、祠を云々、
之を祀り、西波神社と云ふ、その人ともあつた、
神の屋敷、こゝを因める女のいふ、丹
吳家に仕へたる奴僕の家、姓を西波と云
ふ、曰く、こゝを祀り、後、其の地をあらん

ろくと、西波の地、瀬波の地、と云

北室の遺物の大部分を今、新居に存し、時
時、其の集めたり、その世帯、其具、一トあり、
東京の東を付のし、出づる時、一切の地を、
下、其の舊宅の地、置き、其が、北室、
に任せし、こゝを折、んと、田所、
し、其後、四五の、と、年、あ、
七、大、北室の、年、え、

遺物といふに即ちこれなり

此が遺物の仕末しつぎ僅々二三の者
はたをも余りつぎは油のさつふえを全
部と冊差つ家々寄贈しつる乃ち此の
京の事お物くりつるもの左の如し
こゝにさす

法名衝立

一基

ふもと先方二つあり候ふお自ら
作らんとものこそ歷代法名を内書
さるはついの論周延の金紙に古代

物終と盡くえたるも先方の事
係ふ此の衝立り佛壇の側らん帯
に立てつるきさるもの也

仕荒干

真字の佛壇、為付とあるは正
信偈一面御文章一冊内一冊
画入並に仕荒干基
先方自言の善門品七帖

法名幅 三

内二幅と先方の事と係る一物

いささのほをを括りし

懐剣

このと嫁具するも北を余の家へ嫁
さる後いさの作らしたる女の也
未だ油やす、錦囊に入、曰し
を以て作らざる守り長所居
法候の内方の守刀に傷らしたる
し

常盤母ゆえ子の名を取お并に遺者十数冊
多くは綴り後ししお平の草し

いさの草、往年家よりせり余とて
を其印のお漢中うとこの七を賣るの
ゆえにうらふる家のお梅の圓井の
手とり、圓井とて北を、おん
うらふる、冬母に圓
井の草、お梅、おん北を也
おん草、余ゆき、お梅、お
内とてお梅、おん北を、お
三草、おん北を、お梅、お
し、おん北を、お梅、お

残り三、保し丹無家く七歌お三
冊外、字をも虫冊と記念、この書
贈しんう

此の遺書の由、山崎の家長上
巻(字をも)とある、又この如き
の書、入ると四五の揮毫を叔父
高次郎の筆、その版をも伝
字、さん、その(余、暫、亂の、此、為
祖、母の、さ、い、け、も、揮、毫、の、揮、毫
とある、山、市、と、記、し、る、こ、と

と記帳す、こゝに、
お父の、
お父の、
花井、
こゝに、
紙、
貴、

打交 三枚
字三 十枚枚

此の、
あ、

う

扁面 骨つき 七七楊

先考の書本を拂ひんすもの
とて画の意もあつたおこりけ
ん心ゆく致意とあたま、一雨の
雪摺の画あり

曾祖母方尚とるる

余の古年代：物りたる方状也
忠之書本を教へんは
うしきも状えし草紙の文

来ることあらしあすん七十七家

前傳の書とつえあ

次上

(大正八年十一月十四日記)

村に神社の祠あり余の幼時親友を極めおぼき
るく後々思ふをの跡蹟に垂しなり村中の境内
道既すを例とし余も此の祠に地村を
角瓶を減ひることゑかゝる、境内樹木を
生畫る時、祠中より神体と稱して浮木のこ

まのふ大なるものなることと那須野の殺生を打
碎き其心と擲しんと云ふは信あり元と和あの間
基と云ふ寺に其の開祖の遺物若干ありと信観
その余の印時「境内より多く樹木あり殊に寺前
に杉の林ありて中条と云ふ所ありて杉や杉の
木の葉を採りて思ひしに記すも古刹のおも
うげとありしかが此の森ありて前年伐り擲え
り今今より杉のありて即ち其遺証也

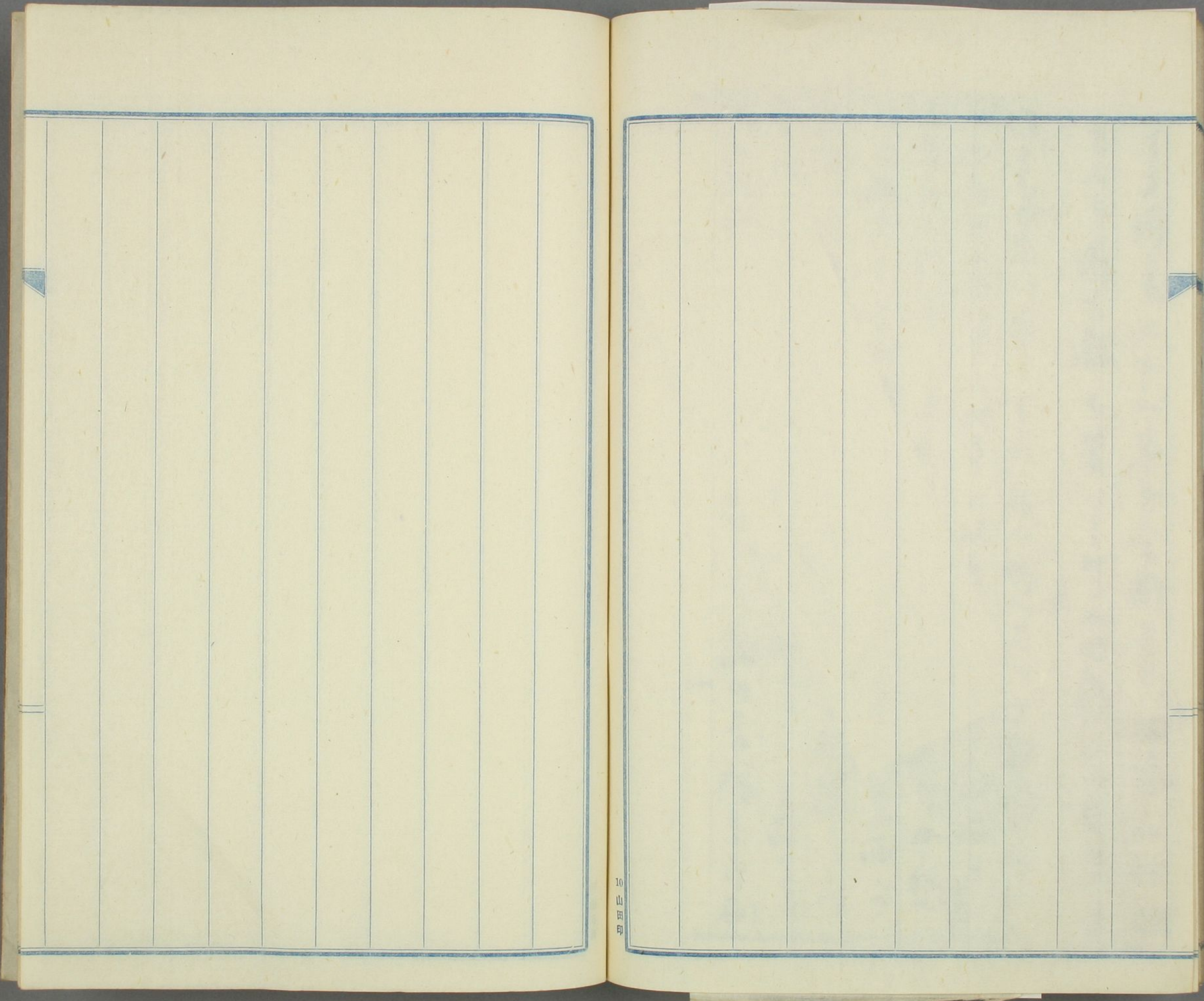
(十一月十号録)

○例の如く圓寺と坊舎に造り二三をわたり、皆佛
龕の如くあるものも今も跡を都に入りて
と得一の如く、一、唐の宮城二溝也思貽の
ありて擲り刻しんと云ふ也、其尾の跡をえん
つるに形あるの依る壽氏其を校して出版を助
けんとある、七余の因縁ありて、信の二書と
藤本山の珠玉漆一本也西廂記中の記を刻
しつものも、其末の西廂房真記一、命を均
刻せり、其書信も其書の紙を以てし、其の
書信と記と、排印す、正徳年分浪平書に上梓

すゝ所を上下二巻と全冊を、破風石印歌
この通言解と著し、その田教山の甘著を
答も、見あらしぬ緒を

○ももえり早くと文一政を唱へたるは
かき井上格格一う起ふと唱へたるは
て維新の以て一うありしと海軍も
もえ祖のむとむ曉しはと音任
おのたまふ一政論のむと早きこと
おのたまふ一政論のむと早きこと
おのたまふ一政論のむと早きこと
おのたまふ一政論のむと早きこと

三
所
一
の
こ
ち
に
あ
る
。
須
く
は
言
ふ
。
馬
を
の
こ
ら
し
め
る
。



10
11
12

以下全て
白紙

